

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受承認第三五二號
昭和二十五年一月一日發行

第六卷

第二號

浄土

二月號

淡雪譜 吉田絃二郎

來迎を得た人 阿川貫達

人間の見直し 佐藤賢順

勤行講讀 藤井實應

世界の涅槃

二月十五日は涅槃會(ねはんえ)、この日にあつて切に想うことは「心の平和」である。貪り、怒り、怨み、すべては煩惱と佛教で言うそれが、どんなにか私たちの日々を、私たちの社會を亂し惱ませていることか。われとわが身を焼きさいなみそれから煩惱の炎が滅盡された境地、内心の平和の世界、それが「ねはん」の妙境である。

さらば友よ、この涅槃を實現するの道ありや、行道ありや友よ、この涅槃を實現するの道あり、行道あり

と釋尊の高弟舍利弗はガンヂスの流れの畔りで、釋尊が説示されたその涅槃への道、その主張と實踐とについて語つてゐる。

如何なる社會、如何なる時代にも、いつも求め續けられてきたものは、平和である。世界の平和建設に國際的に組織されたユネスコの憲章序文は、その初めに、平和への道を「戦争は人間の心の中に於て始まるものであるから、平和の防衛は人間の心の中において建設されなければならない」と言つてゐる。

各國政府の政治的な、或いは經濟的ないかなる取極めにもまして、眞に永遠にして確實な平和を築く道は、全ての人々の「内心の平和」から導かれてくる。佛教が言う慈悲と智慧―ふかき愛とたかき知性と、それこそ平和を築き、ねはんに導くものである。佛教者の主張と實踐とが、眞にひろくふかく世界の人々に結ばれてゆくことを、先ず望みたい。(藤田寛雅)

目次

來迎を得た人……………阿川貫達(5)

人間の見直し……………佐藤賢順(10)

今年に望む……………各界寄信の三……………(18)

淡雪譜……………吉田絃二郎(1)

冬の半日……………北川桃雄(9)

大我上人……………服部英淳(14)

二月の常識……………(18)

日常勤行講讀(二)……………藤井實應(20)

芝園だより



淡 雪 賦

吉 田 絃 二 郎

歳の暮に降つた雪が、春になつてもまだ庭の竹籬の蔭に寒々とつもつてゐる。

一年三百六十五日眺めてゐる狭い庭であるが、自分の庭となれば愛着も起こり、執着も湧いて来る。

芭蕉翁は近江膳所の弟子たちが、芭蕉のために家をこしらえようとした時、執着の念が残るやうな結構な家ならば、御免を蒙る。とかくこの世は風の吹く間の蜘蛛の巣のさだめに過ぎない。それゆゑ執着の残らぬやうな粗末な家ならばともかく、よきやうに取りはからはれたし、といふ意味の手紙を弟子たちにあたへてゐる。

芭蕉のやうな人でも執着心を打ち切ることに苦しんだことが察せられる。

執着心といふものは人間が生きてゐるかぎりにはわたくしたちの心の隅に必ず潜んでゐる。

芭蕉のやうに執着心を斷つことに心を苦しめた人でも大阪の花屋で臨終の床に臥した時、かつて自分が作つた句について、後人の批判を氣づかうやうな言葉を洩らし「これも執着心か」とさびしく自己批判をしてゐるが、藝術的にいへば一句もかりそめにしない芭蕉の良心がうかゞはれるが、これも所詮は執着心である。

芭蕉は俳諧の奥義を問はれた時、「子供等の成すところを見よ」と教へ、自分でも、そのこゝろで俳諧を作つたが、子供にはなり得なかつた。寒山拾得にはなり得なかつた。それでいゝのかも知れないが、芭蕉自身は寒山拾得まで行くことを心懸けてゐた。

さて、わたくしは狭い自分の庭に對しても執着を感じると云つたが、眞實、朝夕に見馴れてゐる庭の一草一

木一石とわたくし自身との間に斷ちがたい心のつながりを感じる。

昨日今日雪につままれた庭には寒椿の紅い花が咲き、眞つ白な藤が峰やわびすけが咲いてゐる。飛び石の小蔭には珊瑚珠のやうな萬年青の實が雪の間から頭をもたげてゐる。これ等の一つ一つにわたくしの心はつながりを感じてゐる。

巨きな樺はこのごろは毎夜のやうに風の音を聴かしてくれる。戦さのところ供木のために、役人たちが來て、この樺の幹のまはり八尺何寸とかいつて、記帳して行つた時どんなに悲しんだことか。

小さな池にはいろいろな鳥がやつて來て水を浴びる。

竹藪に巢喰うてゐる雉子鳩、巢懸、百舌、のじこなどだ。

百舌は小さいが、小鳥の仲間のきらはれ者と見え、百舌が飛びこんで來ると、他の小鳥たちは逃げてしまふ。

このあひだも自分のからだの三倍もあるやうな懸巢が水を浴びてゐるところにやつて來た。百舌は、懸巢の正面から躍りかゝつて行つて、胸毛のあたりを突き、懸巢の群を追ひまくつてしまつた。

百舌はいつも獨りであるが、懸巢は、群れをなして來

る。獨りであるものにはみそさゞい、ひたき、うぐひすがある。いつも小暗い下蔭をもとめて獨りゐるみそさゞいは笹鳴きするうぐひすとともにあはれである。

いつか雪の深かつた日、この小さな池に鳴が來てぽつねんと片脚をあげて思案顔だつた風情を忘れ得ない。

夫婦そろつて來る鳥にあかはらがある。雉子鳩もたいていつがひで來るやうだ。

ひよどりと目白は群をなして來る。目白の鳴く音はやゝもすれはうぐひすにもまさつて人の心を惹く。ひよどりはいたづら者で、せつかく咲いたわびすけの花を啄き落してしまふ。

このごろ市川三舛さんに宇治の初音をいたゞいたので庭の竹山の雪をあつめて茶を點てた。

雪を釜に入れて茶を點てると、爐のそばに亡くなつた妻がゐないことが今さらのやうに感じられる。

ふだんは忘れてゐる事も、をりに觸れては涙を誘ふ。とりわけ雪といふものは人をして多感ならしめる。

雪のつもつた靜かな朝佛前に香を焚けば、香のかをりのかすかに漂ふ風情も常とはちがつて尊く、身にしみて

感じられる。

スコットランドの詩人ロバート・バーンスの詩に雪の夜をうたつたものがある。男に捨てられた若い女が、父無し子をかゝえて雪嵐の夜の道をさ迷つてゐることをうたつたものである。一度讀んで忘れがたき印象をあたへられた。

日本の芝居でも、雪を取り容れたものはかなり多い。三千歳の如きは雪の持つあはれさがきはめて効果的に取り容れられた一つである。

雪は一切の物を淨化するとともに、人間のこゝろをも淨化する。

人生についても、過去について、未來について思惟するやうな心境を作り出してくれるのも雪の朝である。

一切萬有を一つにしてしまふのも雪の朝である。

箱根越す人もあるらし今朝の雪

芭蕉

雪の朝は見も知らぬ人の難儀も身にひきくらべて、あはれに思ひやるほどのあたゝかな心を見出す。

まことの佛心といふのは雪の朝に見出さるゝやうなあはれ心であらう。そこには何の理窟もない、何の道念もない。在るものは同勞同感のあはれ心のみである。

庭の梢にこゝえながらぼつねんと顫へてゐる小鳥や、

家のない小犬をあはれに思ふのも雪の朝である。

今から三十年ばかり前のことであつた。わたくしは飛鳥山のほとりを歩いてゐて雪の道に下駄の鼻緒を切つたことがあつた。すると近所の店から知らぬおかみさんがとんで来て、鼻緒を立てゝくれた。そのをりのありがたさは今も忘れない。何も理窟をつけないやさしさがあらはれる時、佛の國が存在する。

ことしから齡が一つづゝ若くなるといふ。喜んでゐる人も多いであらうが、わたくしたちくらゐの年配になると、さして嬉しくはない。せつかく富士山の八合目あたりまで辿りついたものを、七合目あたりまで無理に引きもどされたやうな氣もする。

日本人の齡の考へ方は、幾つの春を迎へたかといふことである。楽しい春を幾つ迎へたかといふことである。

春は降誕である。佛恩に依つての生まれかはりである。西洋人のやうに數理的に人生を小さく、分割して考へないところに東洋的な達觀的なよさがある筈だ。

お互に若くなつて大いに働くのはありがたいことだが齡にこだはり過ぎてはいけない。

二三日前のラヂオで、今度南米に賣られて行く名馬についての話を聞いた。話の主はその名馬を朝夕手がけて來た調教師である。その人は話をしながらも泣いてゐた。「わたくしはこの馬と別れるのは女房子に別れるよりも辛い」と言つた。短い言葉であるが、人の肺腑を貫くものがあつた。わたくしは、いさゝかなわたくし自身の馬に對する經驗から、調教師の心情を察することができた。わたくしは毎年夏から秋を、信濃の高原の山莊で送つた。そして毎日二時間くらゐを馬に乗ることにした。

馬は毎朝麓の飼主の家からわたくしの山莊に曳かれて來た。わたくしは終日落葉松の下蔭に馬をつないで置いた。

馬はまだ若く、品のいゝ栗毛であつた。額に縦に白い星をいただいてゐた。

朝の乗馬をすまして、馬をつなぎ、溪の方へ汗を拭きに下りて行くと、馬はわたくしの後を追つて嘶くのであつた。

秋になつてわたくしは東京にかへつた。馬は草津道を經て一日に一度、淺間牧場に往復するのであつたが、草

淺道からすこし横に入つたわたくしの山莊に立寄り、堅くとざされた家の周圍を一周りしてからでなければ牧場の方へは行かなかつたと飼主は語つてゐた。

わたくしも馬のことを忘れることはできなかつた。東京へもどつて來てからも、スマートな栗毛の馬で、額に白い星をいたゞいたのがあると、近づいて行つて、たしかめるやうなことをした。

もう十餘年の昔になるが、時々思ひ出す。

物いはぬ四方のけだものすらだにも

あはれなるかなや親の子を思ふ

源實朝

「人間よりも木を愛す」といつた哲人がある。わたくしたちは「人間よりも、物いはぬ畜生」のより一層高い佛性を供へてゐることに氣付く。

初詣で

— 虚子先生宅にての年頭
句會の選に入りたれば —

佐藤治子

初詣で誘ひ行きけり長谷兩寺
久々に相會ふ人の晴着かな

來迎を得た人

阿川貫達

(5)

善導大師の觀經疏に、念佛する者は人中の好人、人中の妙好人、人中の上々人、人中の希有人、人中の最勝人なりとある。妙好人とは念佛稱へて極樂往生する人を云うのである。その妙好人傳は往生傳とも云はれ、支那では少康等の瑞應刪傳をはじめ已下十餘種があり、我國でも慶保胤の日本往生極樂記、大江匡房の續本朝往生傳など多種多様な往生傳がある。明治になつては明治往生傳が集められている。明治末より大正昭和にかけても亦無數の往生人があると、思うが、集録されてないやうであるので、是を記録したいと密に念願して居る。就ては江湖の讀者諸賢、此の企に御協力下され實際に見聞された往生人の眞實を教示して戴きたい。どうか事實を正直に御傳へ下さるやう懇願する。是、一には世の宗教否定論者に對し現に淨土教の生ける信仰者の實績を明示して是に答へ、又一には正しき宗教信仰を以て社會淨化、文化國家建設の基盤たらしめたいと願う次第ある。

さて次に掲げる妙好人は昨年特別講座で見た福本光俊君の令兄で、その熱烈なる信仰を聞き追慕止まざるものがあつた。殊に母君が神道家の人であつたが、令息の信仰、往生の模様を眼の當りに見て以來全く厚い彌陀信仰の人となり、令息他界後廿餘年間若き村人の中にはともすれば淨土往生に疑問を持ち、是を否定せんとするものがあれば、口を極めて令息往生の實例を擧げて往生極樂の確信を述べて頭として譲らずと聞き、令息の正念往生が眞實であればこそ此の人をして是の如き金剛の信心を得せしめ、無信の人々に淨土信仰の因縁を結んだものと思う。依つて福本光俊君よりの寄稿を左に掲げる。

兄は明治三十四年六月十八日島根縣那賀郡今市村滿福寺に生る。父は福本峻哲、母は菊枝、長男にして幼名を一男と呼び僧名を祐俊と稱す。大正八年四月宗教大學（現在の大正大學）に入學し、宗學

に餘念なかりしに、十一年五月廿二歳にしてはからずも病魔の侵す所となり、而も巷間不治の病とまで言はれる結核の極印を押され、青雲の志をもつて東都に遊學中の兄にとつては青天の霹靂と云うか、悲運の涙やるかたなしと云へども遂に學府を去つて父母の膝下に歸つた。

母（一昨年没）は兄より斯かる病に罹りし文を受取つた時は、胸に五寸釘を刺しこまれし心地がしたと生前中語つて居たものである。むべなる哉、廿二歳の兄の下に弟妹五人、而も頼みとする父は中風にて法務意の如くならず、祐俊の學成り業終へて歸山するを一日千秋の想ひにて待ちわびし母にとつては

この胸に五寸くぎをば打たれける

身も世もあらね伏して泣きけり

との想ひは切實であつた。

歸郷後濱田に出て醫師につき専心療養、其の甲斐ありて一時快方に向ひ故山に歸りて全快の日をひたすら待ちしに病勢は刻々と悪化した。左に十二年七月の病床日誌の一部を記載する。（括弧）は筆者光俊君の註

「信仰方面では去年は理論のみで實行（稱名）が餘りともなはなかつたが、今年は此の方面に少しは立入り信念の程度も稍勝れて居るやうに思はれる。されど去年の信仰より本年が深くなつたと云うことは佛様の眼から見たら、恐らくはそうではなくて私の自負心と見

えるに違ひない。私はもつと勇猛精進しなければならない」

毎日三十八度以上の高熱に苦み乍らも尙念佛相續をはげみ、自策自勵の片鱗をうかがふことが出来る。日誌には毎日稱へた念佛の數を記入し、その記入の仕方は朝食までいくら、晝食までいくらと云ふ様に多い日は五千以上の數字が現はれて居る。私は此の日誌を讀みながら健康の身の私が果して毎日五千遍以上稱へて居るかを省みて、恥づかしき極みである。

斯くて病勢は母の手厚き看護にもかゝはらず一進一退にて大正十三年となる。寒氣せまり白雪を置く新春の夜も母は依然として氏神様に人の寢靜まる頃詣で、兄の快癒を祈つた。私は當時九歳で母に従つて時折參つたものである。「お百度踏み」とて母は跣足にて一定の距離だけ歩いて木の葉を一枚づゝ神前に置き、斯くすること百回私にも歩く様にと進めるので子供心に足の冷たさを忍んで歩いたものである。正しい信仰から云へば「祈る」と云う事はどうかとも理窟は言へるけれど、母にとつては止むに止まれぬ「お百度踏み」であつたのであらう。勿論母は本尊様への夜の勤行を終へてから宮參りをして居たのである。

當地方の醫師三人の診察を受けて居たのであるが、裏日本の寒氣いよいよせまる二月二日頃より病苦益々重くなれども稱名念佛倦怠の色なく、身體は衰へたが意識は明瞭で、母に向つて「衰弱せる此の身をお母さんが介抱するのだが、反對なればどんなに好いだらう」

と先立つ不孝の罪を詫びると共に譴然と彌陀如來の赤子たる事を自覺し「悟るに吾が往生は決定せり。お母さん！ 子の死は悲しくとも、往生は悲みに非ず」と病床の身を以て母に専修念佛を勧めた。

二月九日臨終の近からんことを悟る。峻英氏（父の弟子）に請ひて「マンダラ」（極樂の有様を畫いてある圖で行者の業によつて往生して行く場所を九ツにわけてある。是を九品往生と云う）を枕邊に掛けさせ、吾が往生の位置につき確信を得たのかニコリ笑つて「上品上生は吾が器にあらず、正しく上品中生の往生を遂げん」と言つて左の辭世を詠んだ。

一日も早く此の苦を打捨て、極樂淨土に生る日を待つ

罪惡の此の身も御名ともろともに蓮のうてなに登るぞうれしき
假りの宿去りて淨土に還るなり又生れこん神通を得て

二月十二日午前零時頃より容態常と異なる。母は臨終の近きを知り、兼ねて臨終の枕邊には母、峻英、てる代（長姉）三人のみはべるを願つて居たので二人を枕頭に招く。兄は來迎圖を拜み乍らひたすら南無阿彌陀佛と苦しき中より御念佛を相續し、母達は勿論助音念佛を爲し、一切餘言をまじえず一同念佛して居る間に、兄は次第に出る息毎の「なむ、あみ、だぶ」と一息々々の念佛となり、午前五時頃峻英氏に向つて「未だ御來迎が無い」と言う「未だ娑婆の化縁が盡きない爲でせう」と峻英氏答へれば、うなづいて一息一息の念佛を申し初む。間もなく眼を大きく開き頭を左右に動かして空を

仰ぎ、片息の下より一語々々ゆつくり「アレ、アレムラサキノクモガタナビイテ、ミゴトナゴクラクノアリサマ、カンノンボサツニ、セイシボサツ……ゼウボンチュウセウノワウゼウトハモツタイナイ」と出る息にまかせはつきり申して暫らくの間「なむ、あみ、だぶ」と口唇を動かし笑顔のまゝ安らかに息を引取つた。時に大正十二年二月十二日午前五時二十分行年二十四歳。恐らく兄は御來迎の模様をまだまだ口に出して言ひ度く思つたのであらうが「……」のあたりは、如來様直き／＼に正しく往生の場所を御示しになりて「上品中生の往生は勿體ない」と喜び／＼言つたのであらう。

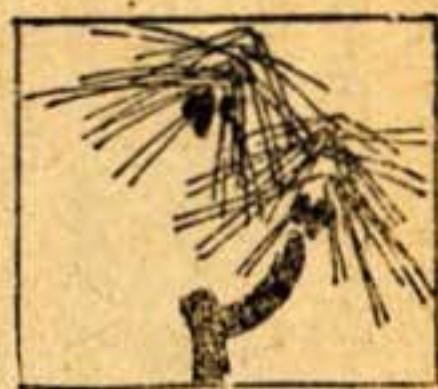
つたなき吾等凡夫の眼には如來様の尊容を常に拜することは出来ないが、念佛申して居れば生存中は必ず應聲即現で攝取護念の利益を蒙り、命終の時には汚れた病床まで御迎ひにあづかりて一瞬の間に「諸々の苦なき極極に往生するのが法然上人の念佛の御教である唯申せ申せば生る念佛に

とやかく色をつければ地獄

終りに法然上人様の御法語を拜讀して此の拙文をとゞめることにしたい。

「阿彌陀ほとけの本願は名號をもつて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給ひたれば、たゞ一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にてそなはるべきなり。」（和語燈錄第五卷）因に兄の法名は

親蓮社縁譽上人祐俊和尚 十念合掌



冬の半日

北・川 桃 雄

師走の押つまつた或る日、思ひ立つて私は、家内子供三人づれで、墓詣りに出かけた。

私の家の墓は芝三田の聖坂上の大乘寺といふ浄土宗の寺にある。三田は私の生れて育つた土地だが、今では同じ東京に住んでも、めつたに來たことはないし、知つた人もゐない。それでも何かほかの下町とは違つた感じを抱かされる。たとへば襷せた子供のときの寫眞をみるやうな、吹きつさらしの急坂を登る私の眼に、關東の大地震には残つたが、戦災でやられたこの町の、やうやく復興しかけてゐる姿が映つた。

大乘寺は聖坂を上りきつて、右手の、崖下の臺地にある。そのために古い堂も庫裡も火を免れて残つた。門までかなり急な下り坂になつてゐるが、私はこゝへ來ると幼ないとき、母や祖母の葬列に加つて、誰かと一緒に陣にゆられながら、ゆつくり下つて行つたことを、きつと憶ひ出すのだ。その前後の記憶はなく、不思議にそこだ

けが頭に烙きつけられて残つてゐるのである。

庫裡の前の小さな花畑に咲き残つた二三本の小菊と一束の線香を、お寺の娘さんから貰つて、凍土の墓地にわが家の墓を訪ねた。午近いといふのに日蔭にはまだ霜柱もそのまゝ残つてゐる。

榎の古木を背に、亡父埋木庵が好みで自然石を基石にした墓石の下には、私の祖母、父母、十六年前に死んだ息子の骨が埋つてゐる。家内と安正とは、まわりの枯草を引抜き落葉を拂ひ、圓伽桶の水を灌いだ。やがて、香煙のながれる墓を前に私たちは立つた。同い歳で死んだ創吉の片見の小學服を着た安正も、創吉兄さんはこゝに葬つてあるんだネ、と念を押しながら、ていねいに合掌した。この少年にとつて、母から聞かされる、彼の生まれる前に消えてゐた兄が、傳説的に理想化されてゐた。私の眼には在りし日の骨肉の佛が浮んできたが、それは遠い昔のやうでもあれば、つい昨日のやうでもある。

べつだんに感傷も哀愁も起らない。やがて私もさう見られる一人になるだらう。「人々は夢でもみてゐるやうにこの花をみてゐる」と云つた南泉禪師の言葉をふと思ひ出してゐると、急に隣り墓地の林が鳴り出して、木枯しはげしく吹き通つて行つた。そのあとの真空のやうな幽かにして寂かな一時。白い陽がくる／＼廻つてゐるだけだつた。

この墓地は南側は崖上の家で、東は境内の長屋が立つてゐて、うつとうしかつたが、戦災で崖上はすっかり畑になつた。墓地全體がやゝ明るい感じがするのはそのせいだらう。

——骨になつてからも娑婆の匂ひを間ちかく嗅いでゐると思ふとあまりいゝ氣持はしないネ。墓地はお前の實家のはうが理想的だ。

私は家内に云つた。裾野の小高い丘の上に大きな富士をすぐ前にした、明るい墓地をおもひ出しながら。

じつとしてゐると、爪先がしびれてくる寒さだ。引き上げようと二人を促すと、家内はうちの墓と對きあつた小さい墓石にも軽く手を合せた。

——もうこの墓も無縁佛になつたのでせうネ、いつ來てもお花もお線香も上つた跡がありませんヨ。

それは私にも眼馴染みの墓であつた。縫工尾上竹治郎行年十七とあり、側面には、陸軍新撰旅團被服課御用に

て鹿兒島出張先ニテ病廢、大阪陸軍病院入舎中本年九月廿四日死ス、同所宰相吉江埋葬、とちやんと碑文まで刻してある。その氏名の感じと刻文とから、何んとはなしに、私の頭には、いつのまにか、肺で仆れた身寄りのない、無口の若い職人のイメーチがつくられてゐた。普通に生き永らへたとしても、やはり、とつくに、墓になつてやがて誰からも忘れられたであらう。どちらにしても結局はさうなるのさ、とチエホフの小説の主人公の呟やきを私は耳にする想ひがした。しかし、感傷を抜きに考へれば、それで悪いわけはないのだ。……

ふたゝび庫裡に戻つて、招じられるまゝに奥の座敷に通つて、熱い茶を喫みながら、住職のKさんや奥さんとしばらく話した。そこからは冬日の當つた麻布の丘や木立が遠くみえた。私は子供の時分、Kさんの若いお父さんが日露戦争で戦死して、幼ないKさんが遠くの寺へ預けられてゐたといふように聞かされ、古風な軍人姿の寫眞の顔が壁にかゝつてゐたのを憶えてゐる。そのKさんも今度の戦争には召集されたが、無事歸り、息子さんは元氣で芝中（高）に通つてゐるといふ。私は疎遠になつたまゝの親戚の誰彼のことや、母校の芝中の噂や、芝中時代の同級生でこの寺に寄宿してゐた、今は越後のはうの寺の住持になつてゐるF君のことなどをKさんの口から聞いた。F君は本堂脇を仕切つて自分の部屋にしてゐ

た。私は遊びに来て、時にはそこに泊つたが、母や祖母の睡る、眼の前の墓地には足を踏み入れようとしなかつた。若い私にはそこは蔭氣な場所にすぎなかつた。——そんなことをKさんに話して私は笑つた。Kさんは思ひ出したやうに、座敷の一隅に立てかけてある圓山派の屏風の繪を指して、筆者や時代などについて、私の意見を訊ねたりした。

大乘寺を辭して、ふたゝび聖坂にかゝつたとき、私は安正にむかつて云つた。——さア、僕の半日はすんだ。今度はお前のお伴だ。賑やかいはうへ出よう。

子供は現金にたちまち顔をかがやかして、あれこれと行先きを注文し出した。

(筆者は美術評論家・共立女子大教授)

峠のお地藏さん

森 正義

まつくらな峠道

汗をかきながら登つたら
小さなお地藏さんが立つていた

誰があげたか
お線香の火が
小さくあかくともつていた

まつくらな峠なのに

なんだか急に
あたりが明るくなつたようだ。

お彼岸の話 — 良書推薦 —

雪解けの坂道にさす夕あかり

彼岸まわりの人くんだりゆく

暑さ寒さも彼岸までと言われ、盆・暮・兩彼岸とならべ稱されてゐるほど、お彼岸は私たちの生活には密接にむすびついている。佛教から流れ出た、或いは佛教に結びついた多くの生活行事の中でも、お彼岸のお寺詣りは大人にも子供にも、都會でも地方でも親しみ深いものがある。

お彼岸について書いたものは實に多いが、その殆どがたゞ經典教義の上からの説明に止まつていて私たちの生活心情の中から湧き出るものに觸れたものは少ない。こゝに近刊の「お彼岸の話」は、著者が現在各地の生活風俗の中に、様々の形をとつて生きており、又古くから傳えられてきた「お彼岸」の心、その趣ふかい姿を分り易く、誰にも親しめるように、新たに執筆されたものである。

私たちは子供の頃を想い出し、或いは周圍のお彼岸風景を眺めるとき、目に映る姿が、そのまゝこの書の中に描かれているのを見出して思わず微笑するにちがいない。この書はそのような親しみの中にこの佛教行事を説いている。

先に好評だつた「お十夜の話」に引つゞいて、浄土トラクト第二集「お彼岸の話」をひろく皆様におすすしめします。殊に、彼岸會用の施本として好適のものです。(三月上旬發行)

人間の見直し

法然上人
法語私釋

—我はこれ烏帽子もきざる男なり—

佐藤賢順

我はこれ烏帽子もきざる男なり。十惡の法然房、愚癡の法然房が念佛して往生せんというなり。(勸修御傳卷二十一)

もしこの法語を初めて讀んで直ちに感動した人があるとすれば、それはむしろ不思議だといつてもよい。この法語の持つてゐる味は、人生苦との長い長い闘いと倦まず弛ゆまざる反省との後に、漸く到達した心境から自然と滲み出てくる味である。私というものを内省し靜思し分析し續けた後に、やつと私の眞の姿に到着した人の偽りない告白である。だからその味はいかにも澁い。

誰れでも己惚れのない者はない。自分の力を高く評價して、何事につけても我れこそは他人の及ばぬ優れた力を持ち、世の中の高い地位に就くに價し他人から崇められる値打があり、日常の行いにおいても清廉潔白に徳行の數々を重ねてゆくことができるであらうし、智慧にかけては萬卷

の書も讀破しようし、宇宙人生のこと一つとして智慧で解決のつかないことはなかりうと思いたがるのである。誠にそうあつてほしい。青年は殊更にそうあつてほしい。若い癖に去勢されたようにまるつきり生氣がなかつたり、早くから野望を捨ててしまつたり、卑屈に自分を卑下して自信を失つたり、知識を敬遠し輕蔑して讀書から遠ざかつたりするのは感心しない。

法然上人は勢至丸と呼ばれたほどで、生れ乍らの天才であつた。勢至とはいふまでもなく勢至菩薩で、智慧の象徴である。伯父の觀覺得業が十五歳の神童勢至丸を連れて上洛して、比叡山の源光のもとに入室させたときの推薦狀には「進上、大聖文殊の像一躰」とあつた。文殊菩薩も智慧の象徴である。その翌年から天台三大部という、うゝ難解な佛教哲學書に食いついてから、二十四歳の時、黒谷の叡

空上人のもとを辭するまでの青年時代の修學は實にすさまじかつた。「惠解天然にして、秀逸のきこえあり。四教五時の廢立鏡をかけ、三觀一心の妙理玉をみがく、所立の義勢、殆んど師の教えに超えたり」と傳記にある。内外の典籍、涉獵せざるなく、幾度かの對論、析伏さざるはなかつた。誰れ言うことなく「智慧第一の法然房」と呼んだが、この名は法然房の學問的位置の高さを語つてゐる。

しかし人間の智慧は無限の力を持つてゐるであらうか。一切を知り盡すことができるであらうか。智慧は萬能であらうか。智慧の力によつて人間は人生苦を離脱して、眞に安樂の世界に入ることができるとあらうか。——そう一度反省するとき、そこにはいろいろの疑問や不安が生じてきた。人間の智慧で計り知ることのできる事はほんとうに僅かである。大海の一滴、九牛の一毛である。むしろ大ていの事はわからないというのがほんとうである。智慧を磨いて生死を離るというような事はとうてい人間にはできない。人間の智慧は至るところで障壁にぶつかる。至る處に限界がある。自己の智慧の力を見直してこう氣がつくと、人間の眞の姿のはかなさ、頼りなさが沁々と感ぜられた。法然房は智慧の力を棄てた。智慧第一の法然房はその優れた智慧の力によつて自己自らを内省し諦視し見直されたとき、ほんとうの自分の姿は、一文不知の法然房であることに氣附かれたのである。もしそれがわれわれ程度の淺薄な

智慧であつたなら、そこまでは氣がつかかなかつたであらう。そればかりではなく、僅かな學問を誇り、淺はかな知性を過信したであらう。智慧第一であつたからこそ、その限界に氣附かれたのである。

智慧という言葉は頭腦の働きとすぐ結びついて、智慧が優れた子供と言へば、秀才型の子供を連想し、智慧を得ると言へば、何事か新知識を得ることである。こういう意味の智慧は、嚴密には、知識といつて智慧と區別しなければならぬ。こういう知識は至るところで限界にぶつかつて挫折する。科學的知識の進歩は日に月に不斷に進むが、それがために未知の領域が減つてきたということはない。未知の世界は、知識によつて少しずつ食い込まれてゆくにも拘らず、その範圍が小さくなつたということはない。依然としてその大さは同じである。知識の限界は實に人間性の限界である。優れた現代の科學者は皆この限界に氣がついてゐる。ポアンカレがそうであつたし、アインシュタインや、オッペンハイマーは、暇な時には梵語の宗教書に讀み耽つてゐるといふことを傳聞した。

智慧と知識とを一應さきに區別したが、智慧はただの知識でなくて、人間の修行と結びついている。佛教では智慧という、諸法の實相を見定めること、實相に隨順することである。佛教で智慧という言葉は元來はこういう特別の意味を持つてゐる。であるから、智慧というと、頭腦の働

きだけでなく、全體の實踐的な行動に結びつく智慧で、身を以つて體得することである。そこで、冒頭の法語に似た上人の他の法語を拾つてみると、

「智慧の眼(まなこ)盲(めし)い、行法の足なえたる此の頃の吾等」

とか、「罪深くして無智の者」とか、「罪惡生死の凡夫」とか「一文不知の愚鈍の身」とかいう言葉がすぐに見つかる。

これは人間を無智愚鈍という知性の方からと、煩惱具足、罪惡深重という道德の方面からと、兩面から反省されたものであると、一應は區別されるであらう。しかし上人がこの兩方の言葉を重ねて無智にして罪深き者として、人間の姿を把らえておられるのを見ても、知性と徳性とが別の働きではなく、智慧は實踐に結びつくものであるから、無智はそのまま罪深き者であることとなるのである。

さて十惡の法然房とはどういうことであるか。十惡とは殺生、偷盜、邪淫、というような重罪のすべてであるが、上人はこうした重罪を犯されたのであろうか。いな、教えとしては、「女人にも近ずかず、不淨の食もせずして、申さん念佛」も、「朝夕に女境にむつれ、酒を飲み、不淨食をして申さん念佛」も、功德等しくて勝劣がないと、説かれたが、御自身は持戒堅固で、全く凡俗を超えた日常であつた。十惡五逆というような重罪を犯されたはずのないのは勿論であるが、それなのに十惡の法然房とは何の事である

うか。それは深く因果の理を信じて今生に人間として生れたのは過去の業因によるもので、過去世においてはいつの時にか、重罪を犯したことがあるかもしれない、という信仰からであつたかもしれないが、それにも増して、強く上人を苦惱せしめたのは、將來の不安、何時いかなる所で、どんな重罪をしでかさないとも限らぬ、というはかなさである。人間性そのものの奥に秘されているこの空洞、それをじつと眺めて、上人は頼りない自己の姿に歎き、いつかは犯すであらう、罪障の恐ろしさに戦かれたのである。苦悶にもいろいろあつて、廣く人生苦というものの中では、移ろい易いことの苦しみ、すなはち行苦(結局は死の不安恐怖)が全體の基調をなしているが、罪の恐ろしさ、罪苦はそれとは性質が違ふ。ほんとうに人間を心の底からゆさぶるものはこの罪苦である。行苦、死の不安からだけではまだ人間のありのままの姿は凝視できない。人間は見直されない。

人間がまず信仰への出發點である。誇張された知性や徳性の幻影を振り拂つて、人間のありのままの姿を把えなくてはならない。宗教にとつて、機——すなわち人間——ほど重要なものはない。機がほんとうに掴まれない宗教は宙に浮いてしまつて、經典の言葉も教義學の難しい概念も、みな空虚な音響に過ぎなくなつてしまうのである。機がしつかりと掴まれば、そこに佛の本願力が頂けることになる。

淨土名僧傳

紙袋法師 大我上人

服部英淳

紙袋法師

ここは江戸、寶曆の年（今から凡そ二百年前）

はやり物 丁字小紋に朱塗櫛 目寄青傘 花のかんざし

投頭巾、たつつけ袴のくぐつ師が歌ふ、派手な元祿模様、織るやうな往來を、鬢切の若衆姿に、奇妙な對照をなして、飄々と行く怪僧がある。街ゆく人の目をひくものは、たくましい體軀に、柔和な目をした圓頂だけ出して、すつぽりと着たつりがね形の紙の袋さすがにつめたい武藏野のからつ風に、紙袋はかさかさと鳴つた。

これが噂さに高い紙袋法師の姿である。人々は、高慢ちきな天狗僧とも笑ふし、怪力韋駄天の神異僧ともおそれた。それを、物知り顔が芝三縁山定月大僧正の賓客、京岡崎の孤立大我上人と説明したその紙袋には、

世の中を袋一つに入かえて思へば輕き我身なりけりと、あざやかに大書してあつた。

「我むかしより紙袋にて、夏は蚊をふせぎ冬は寒を防ぎて楮庵主人と云ひ、又は紙袋法師といふ」上人が自負する紙袋の功能である。

苔の眞清水

淺くともよしや又汲む人はあらじ

我に事たる山の井の水 西行法師

話はさかのぼる。若き日の大我は吉野西行庵に錫をとどめ、日々、奥の院金峰山へ往來していた。白雲扉をとどして室閑寂、蒼苔巖を封して水清冽。その清冽な苔清水を汲み、千古の扉を開かうとした。だがしかし、道はけわしかつた。

苔清水汲ほすほどもなき身にもとくとく落る我涙かな
その業深く、障りの重いことを悲んだ。

彼は孤兒であつた。赤穂の家臣森氏の妾腹ともいふし、またはあの有名な大石良雄の妾腹の子だとも傳へる。母は正妻のねたみを受けて、江戸の北郊にのがれ、彼を生むと間もなく死んだ。義士打入の前年、元祿十三年のことであつた。

まことに運命の子であつた。この運命の子にも、しかし一寸ちの明るい光りがあつた。乳母蓮心である。蓮心はみなし兒を引取つた。彼女は心の溫い人であつたし、念佛の信仰にあつい人であつた。彼はこの人の慈愛の手に育てられた。

けれども、八九歳の頃には、孤獨感と、俗塵を離れやうとする心

が、早くも芽ばえて行つた。そして、自ら短刀で髪を切りおとし、江戸湯島眞言宗靈雲寺に入つた。

靈雲寺の二代、慧光師のもとで、多くの學僧にまじつて研學修行した。自ら立てた誓ひの一つに、「乏食自活し、請を求めず、資具足るを知り、尊爵高祿の人に親しまず、遊戯論の人に親しまず。」勉學は、名利出世のためではなく、少年からも、眞剣な求法であつた。

こゝで佛典はいふまでもなく、漢學國風を學ぶこと十二年に及んだ。その拔群の才學は、しかし同學のねたみを買ひ、罪なきに罪を負はされた。彼を愛した師の慧光も、やむを得ず、さとして寺を立去らせた。所詮彼は俗學の人ではなかつた。

靈雲寺を去つた彼は、飄然として行脚の旅に出た。運命の子は、すでに自分の生を、單なる運命とする人ではなくなつてゐた。十二年のひたむきな追及は、自分を宿業の中に見出してゐた。恐ろしい永遠の業の重壓、罪の深さに泣いた。青年大我は、それをのがれようともがいた。野鶴閑雲、名山靈地を訪ねて、いつか數年は過ぎ去つた、そしてかつて讀んだ山家集の中から、同じ心で終世行脚をつづけた西行法師の歩いた道を知つた。

彼は引きつけられるやうに、吉野山にふみ入つた。そして西行庵にとゞまり、苔清水にその魂を洗はうとしたのである。

花の木蔭に

はげしい修行がつづけられた。後年自ら述懐したやうに、「ひぢを焼き、たなごゝろにともし、皮をはぎ、血をさし」て佛菩薩の冥助を乞うた。ある時は、身を千仞の斷崖になげうつて己れを責め、ある時は、百餘日の間、穀を斷ち、命をかけた。

苔清水汲みほすほともなき身にもとくとく落つる我が涙かな

芭蕉翁が、苔の清水をたづねて「露とくとく」と詠んだ心に通ずるけれども、彼は命をかけてゐた。精根つきた彼は、一夜、つひに巖の下に倒れた。起き上る力もない。たゞ目をとちて、死を待つばかりの身に山氣はせまつて、破れた衣に苔の感觸が冷い。寒月はやせおとろへた彼の姿を青白く照した。

「その時、物あり、忽然腔裡に涌動し、恍たり惚たり。漸くにして四肢遊曳す。心神暢然、宛も甘露を浴するが如し。にはかにして忽ち醒あり」

と傳者は述べてゐる。「物」の消息に至つては、筆者これを現はすすべを知らぬ。彼はおどり上つて、天來の聲に聞き入つた。

「佛の言に曰ふことあり。西方十萬億土を過ぎて世界あり、極樂と曰ふ。其の國に三惡八難あることなし。衆寶をかざりとなし。もし念力具足すれば則ち彼の國に往生し、然る後に三界の外に出づ。其の佛道に於て退轉する者なしと。斯の言、あに人を欺かんや。」心はひろびろとし、體はゆたかであつた。大死一番、身心脱落、つひに淨土の扉を開き、苔清水を汲むことが出來たのである。

生死一大事の因縁を了得した彼は、山を下つた。そして里人のために念佛の教を説いた。

咲き散るも世の習ひぞとみよしのの花の木蔭に南無阿彌陀佛
喜びの心境を歌つたものである。時に二十三歳であつた。

道を尋ねて

理性に裏づけられた化他の方便は、菩薩の道である。彼は、自得の信仰を、世にひろめるために、更に探究を志し江戸に向つた。増上寺をはじめ、關東の學林に期待した彼は失望した。學者雲の如く盛觀を極めた江戸の學風は、多く訓詁記誦の末節にとらはれ、名利

の心にけがれてゐた。彼は明師を求めて、淺草の觀音堂に祈請し、その菩薩の感應を得て、鎌倉光明寺に眞察上人をおとづれた。

眞察上人は、後に華頂山知恩院四十九世をついだ學德兼備の名僧で、その學は各宗を兼ね、當時學母と稱されてゐた。彼は二十六七歳から十年ばかり、上人の膝下にあつて研學し、そのかたはら、諸宗の名匠を尋ね、華嚴、天臺、禪などを參究した。遠く身延山に登り、唱題成佛の宗義もさぐつた。のみならず、廣く儒者、國學者、武術者、技藝者など、いやしくも一能に名ある人々には、つとめて交りを求めた。延享二年、彼三十七歳の時、眞察大增正が遷化された。明師を失つた彼は、黒谷風松軒にかくれ、修行のかたはら藏經を讀み、師恩にむくひやうとした。

彼には多くの著作がある。その廣い學殖と鋭い批判、豊かな文藻は、こうした精進によつて生み出されたのである。

孤雲風に隨ふ

人々は、才學絶倫、文殊菩薩の化現とさえたゝえた。しかし、名利を斷つた少年の頃の誓ひと、吉野の山に獨り泣いた心に、變りはなかつた。世の中を袋一つに入れかへた彼は、自ら孤立絶外と號し風雲流水を友とした。四十三歳の時、石清水正法寺の義穩上人の亡きあと、人々の懇望によつて、やむなくその寺に入つた。

「吾人天性孤雲に似たり、進退風に隨つて曉暉を送る、一錫飄々三十歳、總じて夢裡に塵氛を惹くことなし、とおもひくらせしに友とちせちにすゝめて石清水の正法寺に入ければ、

籠に入れて面白かるやほとゝぎすなくくらす五月雨の空

けれども、彼の學德をしたふ人々は、退山を承知しなかつた。たちまち三年の月日が流れた。

とうとう我慢出来なくなつた彼は、ある日、怪力を現して庭の巨石を投げとばし、長劍をふるつてあばれまはつた。一山の人々は、山主が狂つたものと思ひ、退山を許した。彼は舌を出して大笑し、筆をとつて訣別の詩を作り、そして、

籠を出でゝ心のまゝにほとゝぎす本尊かけつゝ飛びまはらん
我まゝに飛びゆく鳥も心あれば人の惠みをいつか忘れん

と歌つた。人々ははじめて彼の心を知つたが、どうすることも出来なかつた。彼は本尊の前に香をさゝげて、四たび孤立の境界に歸つて行つた。そして、京岡崎にさゝやかな草庵を結んで、夢庵と名づけ、朝に鴨川のせゝらぎを聞き、夕に叡山を仰ぎつゝ、托鉢に暮した。某公が生活の資を贈らうとしたが、斷つた。

有れば焚き無れば鉢をするがなるあさまの煙絶る日もなし

らちもなき世

かつて、元文四年三十二歳の時、義穩上人の招きによつて、石清水正法寺で、門下の人々に宗義を説いた。その間に、しばしば難問を提して、自ら二百五十首の狂歌を作つた。その機鋒縦横、天下の人を驚かしたといふ。

彼の歌は、いたづらに世にすねて白眼視したり、枯木死灰をてらふのではなく、汲みつくせぬ溫い教をふくんでゐた。諸國托鉢の道すがら、伊勢の大林寺に錫をとゞめた時のこと、附近の文人たちがこの珍客を迎へて見はらしのよい料亭に案内した。その席上、「一から十までの順序で七絶の詩を作り、三里の風煙山水と、四隣の遊客を讀み込んでいたゞきたい」と注文した。上人はたちまち、

「一里二階三里清し四隣五欲六塵の營み 七賢八達九天樂む
十錢解き得たり歌舞の聲」

さらに

「一二三四五六七八九十」

と加へ、最後に

小股とり投げんとしてもさつといへば

こける角力のはてらちもない

とからかつた。文人たちは、たゞあきれるばかりであつた。

當意即妙の才氣と、酒脱な風格は、かつては吉野の奥で「露の身の置きどころなし」と悲しんだ、多感な青年僧大我の、たどりついた明るい心の姿であつた。しかし乞食行脚の旅に

草かれてさびしき旅のころも手に

露の恵みのかかれと思ふ

と詠んでゐる。一笠一杖、風月を友として孤立飄然、その旅寝の夢は、やはりさびしい枯野をかけめぐつてゐたのであらう。幼い時に母の懷をしたつた心は、そのまゝ佛の恵みを求めて、行脚の旅をつづけたのである。

渡世一枚起請文

ある人が、渡世の心がまえを尋ねた。彼は一枚の紙を渡した。

渡世一枚起請文

京大阪江戸に、もろもろの遊人達のさたし申さるゝ歡樂の樂にもあらず。又道樂して樂の心地を悟りて、いふ快樂にもあらず。唯だ二世安樂の爲めには、あるべきやうにして、疑ひなく渡世するぞと、思ひとりて働く外に別の仔細候はず。但し利根發明と申すことの候は、皆決定して、あるべきやうにて渡世するぞと、思ふ中に籠り候なり。此の外に六か敷ことを存せば、世の人の憐みに

はづれ、天命に漏れ候べし。道理を信ぜん人は、たとひ萬般のこ
とを、よくよく合點すとも、一切無調法の馬鹿の身になして、尼
妙心の無分別のともがらに同うして、理屈らしき振舞をせずして
唯だ一向に働くべし。

渡世宗の安心起行、此の一紙に至極せり。天然が所存、此の外
に全く別義を存ぜず、後人の邪義をふせがが爲めに所存を記
しおはんぬ。

寶曆四年正月二十三日 天然花押

法然上人の御遺訓、一枚起請文になぞらへた生活の指針である。あ
るべきやうに渡世する」ことは、「なるやうにしなければならない」といふ
あきらめではない。佛にまかせ切つて、念佛しながら働く、すなは
な心の自由さを教へたものであらう。「理屈らしき振舞」をきらひ、
「一切無調法の馬鹿の身」はなり切つてゐた、彼の心の深さがし
のばれるのである。

綾瀬川の水

上人は、天明二年八月十五日、七十四歳で入寂した。夢庵の壁に

夢の世の夢のいほりを結ぶ夢

さめなば夢と見しも夢かも

と書きしるした上人が、夢の世を去つた。何處で亡くなつたのかも
明かでない。ただ、遺言によつて、魚族結縁のために、綾瀬川の下
流に水葬したとも傳へる。まことに、父もなく母の顔さえ知らず、
俗世間を絶つて雲水を友とし、死してはその墓さえもない。

私は、常盤線の綾瀬に近い綾瀬川の鐵橋を通る時、一休と西行を
まぜ合せたやうな大我上人の生涯を思ひ、いひ知れぬ感慨に打たれ
るのである。(大正大學助教授)

年頭に 斯く 念ずる

- 一、年頭先づ佛教界に望むことは、
- 二、講和會議に對し佛教者の態度は、
- 三、原子力と信仰については、
- 四、本誌に對する批判は、

新年號
各界寄信
その三

日本イスラム協會
宗教懇話會理事長

大村謙太郎

一、何萬とある寺院のいづれを訪れても惱みをもつもの——特に若い人々の相談相手になるようになって欲しい。即ち佛教者の時代的脱皮を希望する。

一、佛者各自が自己のもつ宗教的信念を堅持すること、即ち佛の道に精進すること

三、原子力が發見されたからと云つて、佛者の信仰にゆるぎがある筈はない。佛典には更らに大きなことが豫想されてある。

長野善光寺
大勸進貫主 清水谷恭順

一、佛者の「佛陀の實在に就ての認識」を如何に現代の人々にハッキリ理解納得せしむるかの方法論の研究が佛教界全體に望むところである。

二、戦争の再び起らぬやうな主張をすること

それには各國とも移民の自由を認める必要がある。佛者として世界に宣言するがよい(但し日本人の移民のみではない)

三、口に神の愛を説いても、人類虐殺に原子力を利用するような信仰なら、ない方がよい。信仰からは人類の普き幸福のためにのみ原子力を活用すべきである。

四、よくやつていると感服しています。

東大史料編纂官 高柳光壽

一、宗教家といへども特別な人間ではなく普通の人間であるという自覺の下に布教し大衆の歸依を得るよう努めること——これは誤解しては困ります。

布教の經濟的基礎を築くこと。これは前言の、努力と相關を係にある。

二、物質的な面に於いても、日本民族の福祉、について深く考へ、その結論にそつて連合

二月の常識

節分(三日)福は内、鬼は外の豆まき——この鬼ヤライ・追儼(ついな)の行事は古くは大晦日の行事だつたが、いつか節分に結びついたのである。節分というのも昔は、立春・立夏・立秋・立冬の四季の變り目の前夜を言つたが、いまは二月立春前日に固定してしまつた。ともあれ季節の變り目は生活にひとつの改まりを感じさせる。そこで過ぎし日を省み來ん日への希望をもつて除災招福を願ふ生活感情は今も昔も變りがなく、それが節分行事を永く傳へ、盛んにしている。法隆寺の修二會のような古式ゆたかなのから、現代風の趣向をこらした豆まきに至るまで、要は凡愚の自から煩惱の鬼心を追放し正心を得ようとするものに他ならない。

焼餅の頭をヒイラギの葉と串にさして門口に立てる風習も、その惡臭、葉のトガリが鬼を退散させるという意味。われわれの生活の中から邪念鬼念を追ひ拂ふことが第一。

涅槃會(ねはんえ・十五日)お釋迦さまがなぐなれた忌日の法會。寺ではこの日、あの臨終の釋尊を圍んで生きとし生けるものが集り悲しんでいる涅槃の圖像を安置して法要

國に訴へ、時にはその輿論を喚起すること
三、信仰の内容には變化のあるべき理由なし
しかし布教の方法は新しいものであるべき
です。

四、だん／＼色彩が濃くなつて來たと思ひま
す。大衆的な信仰實話は結構です。それを
時々つけていたゞきたいと思ひます。

大正大學教授 大野法道
文學博士

一、いよく法味を豊かにして、正道を歩む
姿を、あざやかにして欲しいものである。

二、自由と平和のゆるがぬ礎石を、すえても
らいたいと、ひたすらに念願する。

三、信仰で須彌山を芥子に入れた譬へもある
原子力だとして、今さら驚くには及ばない。

四、閉ぢこもらぬ信仰のひろい幅を、あつ
い厚みを盛る編集をよろこぶ。

神田寺 友松圓諦
眞理主幹

一、釋尊の教旨に歸一した全一的佛教運動を
起して貰ひたいと思ひます。

三、原子力の發見によつて佛教的信仰は更に
一段の自信を加へるものと思ひます。

四、もつと勇敢に、法然上人の淨土門の信仰
を發輝していたゞきたいものです。「淨土」

の特色がそこにあるのではないでせうか。

戸川靈俊

一、平和運動への參加——ユネスコは直接、
宗教を扱つていないが、その精神はそのま
ゝ宗教精神だと信じられるので、ユネスコ
運動への協力、またMRA運動への關心、
そして戦争の危機の否定へ、

二、審判の日——新たな門出の日、謙虚な
態度にてむかふのみ。

三、佛教の世界に、よく近づく。佛教的信仰
の世界的になる日も近い。

四、装釘美、寫眞、小々の挿繪、——内容を
家庭の主婦むきに——宗教的教養のため——

大正大學教授 松濤誠康

一、先づ信仰感情をすて、佛教の深さを如實
に知り、その上に立つて各自の宗の特長を
再認識してもらいたい。別に何とかして物
質的力を確保して、これによつて佛教精
神を現實に力づくよく現はしてもらいたい。

二、講和は永遠の平和への一步でなければ、
無意義である。大乘佛教の平和は不住の涅
槃である。之に住して相手方のこれに住す
るまで待たう。

三、原子は變質する時にその莫大な力を發輝
する。原子の變質は自己の墮落である。眞
の信仰の力は自己に相應して現はれる。絶
對と一になる時、絶對の力が出る。原子と
は甚だ異なる。

を行うが、地方により寺により種々の行儀が
ある。京の嵯峨清涼寺では二本の大松明をた
て、それを廻り乍ら高聲念佛する。筑後では
この日、麥こがしを作つて口一杯頬ばり惡口
が言えないようにする風がある。

ねはんとは佛教が目標とする究極の境地の
ことで、それはすべての煩惱が斷滅され、も
はや何ものにも碍げられない平和の境地、安
樂の世界である。生活に眞に心の平和を築く
ためにこの日を生かしたい。

勅諭記念會(ちよくしきねんえ・廿七日)名
徳の聖僧を讃仰して天皇が「大師」號を賜ふ
ことは、平安時代に始まるが、法然上人は前
後六回にわたり大師號を賜はり他宗にその例
をみない。近くは明治四十四年二月廿七日、
明治天皇から明照大師の號を贈られ、大正三
年同日には親筆を賜はつてゐる。念佛信仰に
生きるものにとつて、法然上人のみ教の更に
たくく讃仰される記念の日である。

手不足の寺院に(廣告)

五重授戒會事務、傳卷教導受者係など一
切責任奉仕します。手不足寺院遠近に不
拘御照會願ふ。

兵庫縣多田局區内・杉山進順

解	勤
說	行

み佛の前に至心に懺悔す

— 第二講 —

藤 井 實 應

四 奉 請

奉請十方如來入道場、散華樂

奉請釋迦如來入道場、散華樂

奉請彌陀如來入道場、散華樂

奉請觀音勢至諸大菩薩入道場、散華樂

前講に解かれた如くに香を焼いて身を淨め、三寶に敷禮したてまつつたわれらは、みほとけをこの道場におむかへして、(四奉請)そのみ前に於て、至心に懺悔をするのである。(懺悔)

十方の如來、釋迦如來、彌陀如來、觀音勢至の諸大菩薩、今勤行してゐるこの道場に入り來り給はんことを請ひ奉るのが四奉請である。即ち諸佛諸菩薩をこの道場へお迎へするのである。

道場といふのは、もともと佛の成道せられた處、即ち印度ブタガヤの菩提樹下の金剛座をいふのであるが、こゝでは、佛を供養する處を道場といふのである。勤行してゐる當處即ち道場である。

散華樂といふのは、散華は佛に供養する爲に花を散布することである。散華して佛を供養することは印度よりの風習で、今日寺院等で壯嚴な儀式を行ふ時、華宮に華を盛り、散華樂と一齊に唱へて、その時に佛前に花を散布することが行はれてゐるのも、それに基く

のである。花は蓮その他其の季節の生ける花を用ふるのが本來のやり方で、花なき時はやはり其季節の生ける美しき葉を用ひる。紙に印刷した花を用ふるのは第二義的のものであることを承知してをきたい。そして散華樂といふのは、儀式のとき、大衆が一齊に唱へて一つの調子をあらはす言葉である。

無量壽經には、「香を懸け、燈を燃し、華を散じ、香を焼く、此れを以て廻向し彼國に生ぜんと願ふ」と、佛を供養する方法が示されてゐる。われらの今日行ふてゐる勤行の方式もこれに基いてゐる。實際に華は用ゐずとも、その心もちにて、淨められるこの道場にみ佛入らせたまへと請ひ願ふのが四奉請の精神である。

み佛の境地は甚深不可思議の境地にて、凡夫のはかり知るところでない、諸經に説かれてゐる。

「如來の廣大身は、法界を究境め、此の庭を離れずして、一切の處に遍ちたまふ。」(華嚴經)

「諸佛如來は、これ法界身なり。一切衆生の心想中に入りたまふ」(觀無量壽經)などと説かれてゐる。

まことに、經に説かるゝやうに、如來の廣大身は、この座を離れずして一切の處に遍ちたまひ、如來の法界身は、われらの心想の中にも入りたまふのであるといふ。たゞわれらは煩惱に眼障へられて如來を明かに見奉ることができないのである。

佛は常にいませども

うつゝならぬぞあはれなる

人の言せぬあかつきに

ほのかに夢に見えたまふ。(梁塵秘抄)

眼には見えねど、如來はわれらの念願をよく知らしめして、この道場に現はれたまふと信じて道場に入らせたまへと如來を請じ奉るのである。

十方に如來まします。十方とは東西南北の四方と、北東、東南、南西、西北の四維と、上下との十方である。十方の如來は、念佛するもの必ず往生するぞと廣長の舌根を出して證誠したまふてゐる。釋迦如來は、此世に出でまして念佛往生の法門を説き示したまひし大恩の教主である。阿彌陀如來は、われら念佛の衆生をもれなく救ひたまふ四十八願の法王である。

觀音菩薩勢至菩薩は阿彌陀佛の脇侍として、彌陀如來の慈悲と智慧とを現はして、常にわれらを護念したまふ菩薩である。法然上人は、

「只念佛往生を仰いで信ず、釋迦は念佛して、往生せよと勸め、彌陀は念佛せよ來迎せんと仰せられたり、此一事を信じて余事を知らず」(常に仰せられける御詞)と申され、また、

「阿彌陀佛は不取正覺の詞を成就して、現にかの國にましますばさだめていのちをはらん時には來迎し給はんずらん。釋尊はよきかなや、わがをしへしたがつて、生死をはなれんと知見し給ふらん。六方諸佛はよろこばしきかな、われらが歸誠を信じて、不退の淨土に往生せんとするよろこびたまふらん」(一紙小消息)

と仰せられてゐる。この御法語中の六法諸佛は十方の如來のことである。また、

「念佛の行者には、觀音勢至、かげと形のごとく、しばらくも捨離し給はず。乃至、二尊の影護をかうむる。これはこれ現益なり。」

また淨土に往生して乃至成佛す。これは是當益なり」

と仰せられてゐる。

(選擇集第十一章)

念佛申すわれらは、この法然上人のお示しの如く、釋迦如來のみ教により念佛して陀彌如來の御救ひに預るのであつて、十方の如來は念佛すれば、極樂に往生すると證を立てたまひ、觀音勢至は影の形に添ふ如くわれらを護りたまふ。われらはこれを信じ、この悦び

懺悔文

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋痴

從身語意之所生 一切我今皆懺悔 (十念)

諸佛諸菩薩、この道場に入らせ給ひ、今現にわが眼前に在す。如來を前に仰ぐとき、そのみひかりに照されて、おのづから自らを省みることゝなる。そして、そこに自らのありのまゝの相に氣づかせられる。淨き鏡の前に立つ時、はつきりと己がすがたがうつるやうに、如來のみ鏡の前に立てるわれらは、われらみづからすがたがはつきり浮んでくる。それは又、われわれが善き人、無我の人にあふときに、おのれの「我」「迷」といふものをよくよく知らされると同じである。

をもつて日々の生活をやんでゆくのであるが、朝夕勤行の時、この信がいよいよ明にせられ長養されんが爲に、これら諸佛諸菩薩の入道場を奉請するのである。四奉請のかはりに、三奉請とて

奉請彌陀世尊入道場

奉請釋迦如來入道場

奉請十方如來入道場

と唱へ願ふこともある。四奉請とその精神は同じである。四とか三とかの數は奉請といふ言葉の數によつて假に區別するにすぎない。

如來を鏡とするとき、如來とわれらは如何に隔りをるものか、そして己が如何に罪多きものなるかを知る。

佛も昔は凡夫なり

われらも遂には佛なり

いづれも佛性具せる身を

隔つるのみこそ悲しけれ

と、平家物語にあつたが、如來のみ鏡の前に立つ時、この感がしないうであらうか。

法然上人は三部經釋の中に

「そもそもわれら曠劫よりこのかた佛の出世にもあひけん、菩薩の化導にもあひけん、過去の諸佛も現在の如來も、みなこれ宿世の父母なり、多生の朋友なり。しかるにかれはすでに菩提を證し給へるに、われはなにゝよつて生死にはとゞまれるはづべし、はづべし、かなしむべし、かなしむべし。」

と仰せられてゐる。今現に生死にとゞまれる迷へる自らの姿、それをこそはづべく、それをこそ悲しむべきである。學問なきこと必ずしも恥ならず、貧しきこと必ずしも悲しみではない。はづべく、悲しむべきは、今日の自らが菩提を證してゐないこと、相も變らず迷へる凡夫なることである。

善導大師は「我は現に罪惡生死の凡夫」と深刻な反省をされた。法然上人は「十惡の法然、愚痴の法然」となげきたまふた。われらは果して如何なる反省がなされ、如何なるなげきをもつてゐるであらうか。

佛陀の教によれば、今日生死の世界にあつて苦惱するのは、みな過去の惡しき行爲によるのである。行爲を佛教で業といつてゐる。諸々の惡行爲即ち惡業は、始め無き昔から貪欲、瞋恚、愚痴が本である、この貪欲(むさばり)、瞋恚(いかり)、愚痴(おろかさ)によつてもろもろの惡業をつみかさね、現在の迷妄苦惱の世界を現出してゐる。そしてその惡業も、身で行ふか(身)、口で言ふか(語)、こゝろで思ふか(意)によつてなされる身語意三業といふのはこれで、要するにわれらの行爲を三方面に分けて見たのである。

それで今の文をよみ下しにしてみると、

我れ昔より造る所の諸の惡業は

皆、無始の貪瞋痴に由る

身語意より生ずるところなり

一切我れ今皆懺悔す。

となる。この文は通常懺悔文と呼び、華嚴經普賢行願品に出てゐる文である。懺悔とは、梵語の懺摩と中國語の悔過と混合して出來た言葉で、梵語の懺摩は忍容を乞ふ意であるといふ。即ち懺悔は過を悔い、容しを乞ふ意となる。

おもへば、われわれは知らず識らずの間に過を犯し罪を重ねてきている。過ちを過ちとも知らず、罪を罪とも思はずに暮してきた。

今、み教へにより、み光に照されて己が過ち、己が罪に氣づかせられたのである。光が照ればこそ塵も、汚れも分る。光いよいよ明にして、罪いよいよ深きことに氣づかせられる。己が身の罪惡に氣づいたのもこれ全く如來のみ光に照されたからであり、み教への賜といはねばならぬ。殊にみ教へを仰げば仰ぐほど、自らの罪に氣づかせられる。われらはともすれば、自己のことは棚にあげて、社會がわるい、時代が悪いといふが、われ一人にて生くる生命ではない。社會歴史の中に生きてゐるのである。社會の濁りと自己の過ちとを離して考へてはならぬ。社會の濁りはそのまゝわが汚れと見るが正しいのである。かくながめることによつて、自己の罪惡は社會の濁りを背負つての自覺となる。われらは氣づくことと氣づかさるとによら

ず一切の無始以來の罪を懺悔しなくてはならない。

「人はさきにあやまちをなすとも、後に止めて再び犯さざれば、これ世間を照すこと、雲の消えて、月のさやかにあらはるるが如し。」

(増一阿含經三二)

「若し人重罪を作り、作り已りて深く自ら責め、懺悔して更に造らざれば、能く根本の業を抜く」(業報差別經)

「若し罪を覆ふ者は、罪則ち増長すれど、發露して懺悔するものは罪則ち消滅す。」(涅槃經)

懺悔の功德は諸經いたるところに説かれてゐる。實懺悔すれば清淨なり、安樂なり、罪惡は滅し、我執はなくなり、眞實の大道がそこから坦々として開けて来る。

雲の中に佛のみ名をとらふればつもれる罪ぞやがて消えぬる

法然上人

罪惡あり、我執あり、貪瞋痴に覆はれてゐては佛は分らぬ。然もサンゲすることによつて罪惡は消え、我執は無くなり、罪惡の根本をなす貪瞋痴も淨めらるゝが故に、懺悔してこそみ佛を見たてまつることのできるのである。

しからば如何なる方法を以て懺悔するのであるか。事のさんげ、理のさんげなど古來各宗にいろいろと説かれてゐるが、善導大師は三品の懺悔といふことを説かれてゐる。

懺悔に三品あり、上と中と下となり。上品の懺悔とは、身の毛孔の中より血を流し、眼の中より血出るをば上品の懺悔と名く、中品の懺悔とは偏身に熱き汗毛孔より出で、眼の中より流すをば中品の懺悔と名く。下品の懺悔とは、偏身徹り熱くして、眼の中より涙出ずるをば下品の懺悔と名く」

としてその熾烈な懺悔の相を示されてゐる。

然しながら、われら凡人は果してそのやうな熾烈な懺悔が爲し得らるゝであらうか。これら熾烈な懺悔觀は解脫分の聖者のなすところであると善導大師も述べられてゐる。

すでに自己の罪過に氣づくことのできたのも如來の御力による、その懺悔も亦如來の御力によるのほかはないのである。

故にわれらは、何事も照覽したまふ、み佛の前に、この懺悔文を唱へつゝ、この至らない自己の頭をさげきつて、助けたまへとすべてを阿彌陀如來にまかせまつるのほかはないのである。

「念々の稱名は常の懺悔なり。」

と善導大師の仰せられし如く、如來助けたまへと南無阿彌陀佛と申し、念佛相續することが、念佛者の常の懺悔である。それ故に懺悔文の後に十念を唱へる。

十念は十遍念佛を稱へることであるが、それは阿彌陀如來第十八願の御文の中の乃至十念のお言葉がもとになつて十遍の念佛を稱へることになつたのであるが、念佛は一念に一度の往生をあてがひたまふてあるのであるから、念々稱名は悉く往生の念佛である。數にとらはれないで念佛相續するが本願の御趣旨に添ふことになるのである。こゝでは動行といふ一つの方式の中に行はれるのであるからきまりをつける爲に十遍の念佛を唱へることになつてゐるのである。

かくて、諸佛諸菩薩道場に入りたまひ、そのみ前に於て至心懺悔し、十念して阿彌陀佛に歸命したてまつつたのであつて、こゝに於て、正しく、御法を頂戴すべきすべての準備は整へられたわけである。

芝園だより

◇新入會申込の方々に◇

法然上人讃仰會は、申込によつて何時からでも、誰でも入會し、月刊信仰雜誌「淨土」の配布をうけることができます。

◇本會は、淨土宗祖法然上人が示された念佛信仰をいまの生活の中にふかめてゆくとともに、更にひろく社會に正しい信仰をたかめてゆくために結ばれたものです。

◇會の目的をたゆまず達してゆくために、毎月「淨土」を刊行し、會員に配布し既に十六年に及んでいます。世間の出版界が流轉の姿を辿つてゐる戰時、戰後を通じて、「淨土」はつねに着實に歩んできております。淨土の歩みはとりもなおさず、正しい信仰に生き抜いてゆく會友の方々の歩みに他なりません。

◇その他、本會では眞に心の伴侶となる圖書の刊行頒布、講演會、座談會などの事業を行うとともに、多くの人々と廣く手を携えてゆく上から、會員の申込によつて講師の紹介派遣もいたします。

◇會員となるには、半年一三八圓または一年二七六圓を添えて申込まれる他には別に手續を必要といたしません。申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

◇會員は淨土に投稿することができます。但し採否は編集部にお任せ願います。

◇新緑清蔭の候―誤植にあらず―

青葉の仙臺東北大學で淨土宗教學院研究所によつて第三回宗學大會が開催される豫定。充實せる高き水準をゆく學會とし期待されると共に、東北人士と「淨土」がふかく結ぶ機縁が與えられることを今から待望している。

◇昨年末、眞野正順氏は加藤精神龜井勝一郎兩氏と鼎談「信仰の反省」を放送された。佛教人の積極的な主張と實踐が社會の全面に生きてゆくことを切望する。

◇ツンと冷え透つた冬空に聳然たる増上寺の山門がみえる。その向いに現代社會の動向を鋭く反映する勞働會館がある。その横手にはカーテンの色も鮮やかな芝パークホテル、きれいな高級車が出入りしジープが止まつている。

◇諳觀と混沌、古典美と機械美、便利と不便利、こうした象徴に圍まれて淨土の編集室がある。これ

らいま日本にみられる一切の對照的なものの錯綜し苦惱する中に、常住の世界を築こうと、「淨土」は進んでゆく。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。着次第御送本申上げます。

「淨土」 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿五年 一月二十日印刷
昭和廿五年 二月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人讃仰會

振替 東京八二一八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

浄土トラクト第二集近刊

誰にも親しめて分り易いお彼岸の話
興味ふかい民俗を描いたお彼岸の話
自然に信仰心が養われるお彼岸の話
正しい信仰が求められている。文書傳道こそ、それに
こたえる第一歩。お彼岸の施本に最適の書

竹 中 信 常 著

お彼岸の話

一部五圓
送料六圓

本文十二頁 別表紙裝釘

◇二月末發行、豫約申込順に送本いたします

◇送料一〇部以上十二圓、一〇部を増す毎に六圓増

但し五十部以上三五圓、百部以上當方負擔

◇二百部以上は希望申込(但し二月末限)により表紙に
寺名刷込をいたします。

申込所 東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二二八七番

浄土トラクト續刊豫告

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが気軽に手にできる廉價——浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられ、續刊の要望が多いので、次のような企劃で順次に新刊いたします何卒御期待下さい。

お十夜の話

藤田寛雅著

四圓送六圓
既刊賣切

お彼岸の話

竹中信常著

近刊

お念佛の話

佐藤賢順著

近刊

お盆とおせがき

近刊

先祖とお墓の話

近刊

その他、續刊企劃中

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩を進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會